

## 論 説

### 楊逵の戦時下作品再考 ——「農園」の視座を手がかりに——

邱 政荊

- 第1節 楊逵における農民文学の両面性
- 第2節 農村の感情動員と女性表象：「水牛」における「憤り」の描出
- 第3節 農園のレトリック：「鶯鳥の嫁入」における「憐憫」と「妙な気持」
- 第4節 「糞リアリズム論争」の時代：蔑称の転化における農の意義
- 第5節 戦争末期の農園：ユートピア描写から主体の変容へ
- 第6節 結論

#### (要約)

プロレタリア作家・楊逵は、農村をよく描き、農民運動にもかかわったため、農民運動史や抵抗文学史の文脈から評価されてきた。他方、戦時期の楊逵作品には、「抵抗か協力か」の二項対立では容易に分類できない特徴がある。それは、彼が戦時期に創設した「首陽農園」の両面性にかかわる。本論は、「農園」を中心に、戦時期に至る楊逵作品における農の表象を分析し、その両面性に接近する視点を構築する。まず、帝国日本の農民文学の文脈を抑えた上で、楊逵における「農園」の思想性を提示する。次に、1930年代の農村表象に「憤り」による大衆動員の意図があると指摘する。さらに、農園生活を描く「鶯鳥の嫁入」(1942年10月)を読解し、これまでとは異なる世界観や他者の描き方を解明する。そして、その特徴は楊逵が翌年の「糞リアリズム論争」に打ち出した論理と通底すると指摘する。最後に、戦争末期の楊逵作品にみられるユートピアと労働賛美を分析する。

## 第1節 楊逵における農民文学の両面性

### 1. 楊逵と帝国日本の農民文学

台湾のプロレタリア作家・楊逵は、1930年代に作家デビューして以来、労働者や農民を主な題材に、日本の左派文学運動との連帯を模索しながら活動を続けた。彼が1920年代後半に農民組合運動に幹部として参加したため、「農」は彼の創作において、つねに中心的なテーマであった。この特徴は、彼を抵抗作家として評価する際の基準の一つとなっている。台湾における「農民文学」という枠組みを提起した葉石濤は、「[台湾の農民文学が] 濃厚な民族風情および反帝、反封建的なイデオロギーを有し、彼ら〔農民文学作家たち〕が描く農民と農村の小説には、自然に強烈な社会意識が表れている」<sup>1</sup>と論じている。葉の議論を参照しつつ、近現代の台湾農民文学史を系譜的に論じた洪鵬程は、各時代の政治、経済、社会状況を深く反映する文学として、1920年代から1990年代までの農民文学を取り上げ、楊逵をその文脈に位置づけた<sup>2</sup>。植民地台湾の農民文学の展開を振り返ると、1920年代には、すでに頼和「一桿「稱仔」」(1925年2月)や楊雲萍「黄昏のサトウキビ農園〔黄昏的蔗園〕」(1926年9月)などの小説がすでに『台湾民報』に登場し、植民地警察や法制度に翻弄された農民が取り上げられた。1930年代前後になると、世界的な経済恐慌のなかで貧困に陥り、労働者や犯罪者となった農民の生活に注目した楊守愚「凶作の年は死を免れず〔凶年不免死亡〕」(1929年4月)、呂赫若「牛車」(1935年1月)、張慶堂「鮮血」(1935

年9月)、蔡秋桐「四兩仔土」(1936年9月)などの作品が相次いで発表された。同じくこの時期に文壇に登場した楊逵の作品は、失業者となった農民の生活の悲惨さを描くこれらの作品と共通のテーマを持ちながら、その悲惨さから農民の「抵抗」や「闘争」の側面を引き出そうとする点が特徴的であるとされている<sup>3</sup>。実際、たとえば楊逵と同じく雑誌『文学評論』に作品を掲載した呂赫若の「牛車」と、のちに取り上げる楊逵の「水牛」(1936年1月)を比較すると、前者では妻に怯える失業者の男性の恐怖が注目されているのに対し、後者では犠牲となる女性を描くことで、主人公男性の抵抗への覚醒が強調されている。また、1930年代の楊逵作品にみられる、「農」と「抵抗」を結びつける特徴は、戦時期に至っても継続しているとも指摘されている。たとえば、戦時下の楊逵の活動を詳細に実証し、彼が戦時下でも「左翼の立場にしっかりと立ち」、「植民される台湾人がどのように苦痛の深淵でもがくのかを描くことで、植民地統治に痛烈な訴えを提出した」<sup>4</sup>と論じた黄惠禎は、まさに作家研究の側面から、彼の戦時下の抵抗的な作品における農民表象の重要性を指摘したのである。

楊逵と「農」の関係性を示唆したこれらの先行研究はいずれも、台湾文学史における農民文学論の論点を取り入れ、楊逵文学に現れている植民地農村統治への抵抗に注目している。その際、楊逵が描いた農民は、「苦痛の深淵」に置かれたり、「反封建」的な抵抗者として位置づけられたりした。しかし、この評価は彼が描いた農をめぐるすべての作品に当てはまるものであろうか。彼の作品には悲惨な農村がたしかに登場しているが、1940年代の作品には農作生活や純朴な農民への憧憬も描かれており、植民地台湾における「農」への肯定と否定が複雑に絡まっている。彼の「農」をめぐる思想を理解する際、こうした両面性が重要である。本論の目的は、戦時下における彼の「農民文学」が現した特徴を明らかにし、この両面性を理解する視点を構築することである。そのために、先行研究では言及されてこなかった、帝国日本の戦時期農民文学の文脈を把握した上で、彼が戦時期に接近した「農園」の思想を位置づける必要がある。

山田清三郎によれば、1930年代前半の日本の農民文学は、経済恐慌による農村の衰退を背景に、同時代における農民の苦難を取材したプロレタリア文学者によって創作されていた<sup>5</sup>。楊逵がこの時期に発表した「水牛」(1936年1月)や「田園小景」(1936年6月)などの作品に、道路建築に動員された農民が登場したのは、まさに植民地台湾農村における同時代の状況取材した成果と言えるだろう。しかし、日中戦争以降、農民文学懇話会(1938年)や大陸開拓文学会(1939年)などの国策文学者団体が相次いで成立すると、衰退した農村を取材する農民文学は、和田伝の『大日向村』(朝日新聞社、1939年)や島木健作の『満州紀行』(創元社、1940年)が代表するように、しだいに国策による農業移民を取り上げるようになる。

安志那が指摘したように、戦時期の国策としての農民文学は、開拓地を新生活のユートピアとして描く側面<sup>6</sup>がある一方、形式上「現地報告」<sup>7</sup>の側面を多く含んでおり、「農民文学者にとって、国策文学は既存の農民文学の方法論と目的からの逸脱ではなく、むしろその延長であった」<sup>8</sup>ため、「最低限の「真実」を保持できる可能性」を有している。言い換えれば、戦時期農民文学は、国策的なユートピアを目指す「理想」と現実をそのまま描く「報告」という、相反する要素が同居しているゆえ、翼賛と抵抗の二項対立では捉えきれない要素を含み得る。この時期の「報告文学」

の特徴について、森山啓は農民文学懇話会の編集した『土の文学作品年鑑』において、「説話体」などの技法を駆使し、「自然主義当時からの文学正統」である写実描写から距離を取り、作家の「理想」や「生活感情」<sup>9</sup>を表現したものであると論じた。それは、写実でありながら、著者の主観性や感情をより多く含んだ、「旧時代の写実性とは異なったもの」であった。

楊逵は、1935年前後にリアリズム論<sup>10</sup>を提唱し、1937年に「報告文学」に注目し始めた<sup>11</sup>ように、農村を描く際、写実の重要性を意識していた。他方、彼もまた「自然主義の如き暗黒面の綿密な描写」<sup>12</sup>を拒否し、読者を動かす「感情」の重要性を強調していた。そんな彼は1937年6月から9月に訪日した際、日本の読者向けに「〔日本の文壇に〕必要なことは、地方からの輸血であり、大衆からの輸血である。この輸血はルポルタージュに求めなければならない」<sup>13</sup>と書き、日本の「多くの雑誌のルポルタージュに対する気構」<sup>14</sup>を評価したように、日本文壇における戦時期報告文学の流行をも意識しながら、自身の議論を展開したと思われる。そんな彼は社会運動が衰退した以降の日本文壇における「頽廃」<sup>15</sup>を問題視しており、打開策として「報告文学」に注目した。報告文学に「理想」や「感情」を込める必要を論じる彼の主張は、農民文学懇話会が展開したものと類似する側面があった。

一方、楊逵と農民文学懇話会の間には大きな違いもあった。戦時期日本の農民文学では、満州や北海道の「開拓」が新たに注目されたため、開拓地を新生活のユートピアとして描くなど、セトラ・コロニアリズムにかかわる要素を含んでいた。そして、大陸開拓文学会に参加した張赫宙が『開墾』（中央公論社、1943年）などの作品で朝鮮人満州移民を描いたように、農業移民が新天地を開拓する叙事は、内地の日本人に限定された問題ではなかった。しかし、台湾出身の作家はこの文脈に参入することが難しかった。戦時期の植民地台湾は日本人の農業移民を受け入れること<sup>16</sup>はあっても、満州に農業移民を輸出することがほとんどなかった<sup>17</sup>ため、同じような題材が報告文学の対象となりづらかった。この同時代文脈から考えれば、楊逵が「理想」や「感情」を込めた農民表象は、方法的に帝国日本の農民文学と共通しながら、台湾的な特殊性を有していた。

## 2. 「首陽農園」の思想

戦時期における楊逵の農民文学の思想は、こうした同時代の帝国の文脈とは無関係ではない。しかし、より重要なのは、作家自身が置かれた環境であった。『台湾新文学』が1937年に停刊になったのち、楊が訪日したことはすでに述べたが、彼は滞在中に一度逮捕されている。釈放後は台湾に戻るが、債務を含むさまざまな疲労もあり、肺病のために倒れた。その後、知人の入田春彦からの援助で債務を処理し、台中に「首陽農園」という名の農園を開設し、1942年に「無医村」で文壇復帰するまでの間、耕作生活を続けていた。日本において、農民文学を巻き込んだ国策文学が盛んに論じられた頃に、楊逵は文学活動を中断し、実際に「農民」となったのである。

「首陽」という名は、周知のように、伯夷と叔斉が殷商の滅んだ後も次の君主に仕えず、首陽山に立て籠もり、最終的に餓死したという『史記』の記述から取られている。彼らの事績は、中国史において、とくに清代に生き残った明の忠臣たちによって多く引用され、「遺民」<sup>18</sup>というキー

ワードとともに、さまざまな文脈で想起されるものである<sup>19</sup>。したがって、文学運動の挫折を経験したばかりの楊が、抵抗の拠り所として彼らの心境に自分を重ねたことは、想像に難くないだろう。その意味で、首陽農園は単純に物質的な場所を超えて、戦時下という現実に対する思想的な意味を帯びている。戒厳令下の戦後台湾においても、首陽農園の抵抗的性格は作家本人によって繰り返し言及された<sup>20</sup>。陳淑容の研究は、宮崎出身の入田春彦が首陽農園の創設にかかわったことから、首陽農園と武者小路実篤の「新しき村」の思想との接点を見出している<sup>21</sup>。その意味において、首陽農園はユートピアとして構想されていた。

しかし、現実というノイズが入り込むことで、楊逵文学における農園も、開拓地の農民文学と同じように、純粋なユートピアとして描かれることはなかった。農園成立の年に発表された「首陽園雑記」をみると、農園の思想的意味はけっして単純なものではなかったことがわかる。「さう言ふ〔伯夷のやったような〕事の出来ない俗人の僕は中央山脈への逃避もならなかつたのだ……伯夷の靈魂でもあれば、この大馬鹿者を許して置かないであらう」<sup>22</sup>と自嘲する楊にとって、首陽農園の経験は、そもそもその創設時から、理想と現実のギャップが含まれた。彼の戸惑いは、戦後においても「ただし私は聖人君子ではない。だから、飢え死もしませんでした」<sup>23</sup>という発言の形で残されている。

その理由は、農園の性質とかわる。農業資本や地主が所有し小作農を搾取する場所としてイメージされる植民地農村や農場とは異なり、農園は個人や世帯レベルで都市の近郊に農作を行うための場である。火葬場の隣の「台中市梅枝町十九」<sup>24</sup>に位置する首陽農園は、まさに楊が「中央山脈への逃避もならなかつた」と述べているように、人里から離れた場所ではなく、当時の台中市街地の周縁部に位置していた。植民地台湾において、少なくとも1930年代からすでに官設の市民農園が都市の周縁に設立され、都市生活の「潤い」<sup>25</sup>の場、あるいは近代的農法を教授する「指導農園」<sup>26</sup>として機能しており、資本企業の営利とは異なる目的を持っていた。「土をいぢりながら文学をやらうと言ふ勤々力行の士を求む」<sup>27</sup>という募集広告を出した首陽農園もまた、過剰な政治的意味を持たないという意味において、植民地警察から監視を受けながらも、それらと共存し得た空間であった<sup>28</sup>。

1940年代の戦時期になると、日本政府は都市部住民に対して「家庭菜園」「市民農園」による食糧増産の推奨を始める。日本内地において、家庭農園、家庭菜園の設立を勧める広告は、『農業世界』『糧友』などの農業専門誌から、『婦人倶楽部』『週報』などの総合誌まで広くみられた。たとえば、1942年4月に発表された安達巖「糧食持久戦争と帝都周辺の開発」では、「近代戦と地域的食糧持久」をテーマに、首都圏周辺の耕地再開発計画が述べられており、戦時下における市民農園は、農村の外部においても食糧生産が可能だった場として、総力戦体制に貢献していた<sup>29</sup>。そうした中で、総督府の情報課委嘱作品として発表された炭坑取材記風の小説「増産の蔭に」には、動員された労働者のための「蔬菜園」の設立に、自らの農園経験を生かそうとする作家が、語り手として登場した。戦時期の農園経験は、けっして伯夷と叔斉のような自閉的なものではなく、戦時社会のシステムに深く結びつかざるを得ないものであった。

ユートピアと目される農地と、現実で遭遇するさまざまなノイズ。写実的な報告と、感情を込

めた語り。一見相反する両面性を同時に含んだという点において、戦時期日本の開拓文学と楊逵の農民文学は同時代性を共有している。しかし、楊逵は農園という場所において、それを独特な形で表現した。「首陽農園」は、この意味において、楊逵における農の思想を考察する時のキーワードとなり得る。本論は、農園の思想性を明確に表した「鷺鳥の嫁入」（1942年10月）を讀解し、同作以前と以降の思想的展開を追跡することで、楊逵の植民地期における農の思想と表現の変遷を明らかにする。まず、比較のために、『台湾新文学』創刊号に掲載された「水牛」（1936年1月）を取り上げ、植民地の「抵抗」を描く時、初期の楊がどのように農村の場所性を構築したのかを明らかにする。次に、上述の「鷺鳥の嫁入」という農園を舞台とした作品を取り上げ、「水牛」とのテーマ上の類似と、異なる感情の描き方を解明する。さらに、1943年に発生した「糞リアリズム論争」のなかで発表された「糞リアリズム擁護」を取り上げ、ロマン主義との関連に触れつつ、農園の視座が反映されていることを解明する。最後に、戦争末期の作品に現れる美しい農村や農園への憧憬を取り上げ、その変容の実態を明らかにする。

## 第2節 農村の感情動員と女性表象：「水牛」における「憤り」の描出

楊逵の日本文壇デビュー作である「新聞配達夫」（1934年10月）は、1924年から1927年における彼の日本での労働経験を基に、日本で働く台湾人労働者と日本人運動家の連帯を描く小説である。その後半部に、主人公が「苦しめられてゐる新聞配達夫、失業者達に、鬼畜のやうな主人に対抗する方法を教へることを心得てゐる人なら、製糖会社、不都合なる……、村長等のために惨酷な目に会されてゐる私の故郷の人達に対しても、何等かの助言をして呉れるであらう」<sup>30</sup>と、日本の「鬼畜のやうな主人」と故郷の「製糖会社」を繋げ、両者に対抗する連帯の可能性に気づく場面が描かれている。すなわち、プロレタリア運動の延長線上で、台湾の農村問題を捉えていた。

実際、1927年に台湾に戻ったのち、彼は農民運動に打ち込んだ。同年から台湾文化協会に参加するだけでなく、台湾農民組合の第一次全島大会で中央委員と常務委員に選ばれ、熱心に農民運動に従事したが、繰り返し逮捕されていた。しかし、一年後の1928年に、指導部との意見の相違から解職された。その後、彼は1932年に「新聞配達夫」の前半部を『台湾新民報』に掲載し、同作が1934年に日本文壇から注目されたことが追い風となり、作家として活動をしていくこととなった。この時期から始まった文学活動は、失敗した農民運動を継承する側面もあり、大衆へのアプローチが重要な目的となっていた。

1935年前後、台湾の文芸大衆化が盛んに争われた中で、彼は雑誌『台湾新文学』を創刊し、自らの立場を発言する場を構築しようとした。この時期の楊は、芸術表現における「感情」の本質的な役割に注目し始めた。「本来芸術と言ふものが、作者の思想感情を人に伝動する為めの一つの手段である以上、作者がその立場から……より多く読者を自分と同じ感情に組織化しやうと考へるのは当然であり、ここから、芸術は大衆のものであると言ふことも理解出来るのである」<sup>31</sup>といった主張があるように、この時期の彼は芸術の本質を作者の「思想感情」の伝達として定義

し、「読者を自分と同じ感情に組織化」すること、すなわち一種のコミュニケーションとしての文芸観を打ち出していた。そして、「人間の本来の要求は、不幸に悲しみ、不法に憤り、よりよき生活を追求する。……〔このような〕人々の感情を表現したものは、それが真に大衆を動かし得る場合、最も高き芸術である」<sup>32</sup> という主張もあるように、彼はコミュニケーションの先に、「大衆を動か」すことを見出していた。

しかし、「読者を自分と同じ感情に組織化し」、「動か」す「作者の思想感情」は、どのようにして伝わるのだろうか。垂水千恵が指摘したように、大衆読者が出現しつつある 1930 年代の日本に比べ、2 割から 3 割の人口しか日本語を解していない台湾において、楊逵の「大衆化」運動は届くべき大衆に伝わりにくかった<sup>33</sup>。このことは、同時期の楊逵作品に農村の識字層が、主人公として多く登場したことと関連する。識字層をまず「動か」し、その先に農民の救済がある。この二層構造のために、彼の描く農村には「導く者／救済されるべき者」の構図が鮮明であった。

ここでは、楊がこの時期に主導した雑誌『台湾新文学』に掲載された彼の作品を例に検討しておく。創刊号に掲載された「水牛」は、植民地台湾の女性の人身売買をテーマに、彼の試みを構造的に現した作品である。この短編小説は、東京に留学していた台湾人学生が帰郷後、農村の少女と経験した出会いと別れを描いたものである。あらすじは以下の通りである。台湾へ帰郷した後、「東京の学校で緊張し切った神経を」故郷の自然のなかに体を「休ませ」ている「僕」は、農作しながら水牛の背にのって読書に励む農家の娘・阿玉と知り合う。二人が「毎日皆から離れた木の蔭で色々の話を」するうちに、主人公は阿玉の父が小作農であり、地主に畑を取られたため、苦しい生活を送っていることを知る。ある日、阿玉は待ち合わせの場に来なくなる。家を訪ねると、阿玉は父が道路修繕の仕事を始めたこと、そして「小作料を払ふことが出来ないから」、水牛はすでに売られたことを語る。主人公は水牛が「南支に輸出」されるという新聞記事を思い出す。「水牛を飼つてゐる台湾から、そんなに多くの水牛が輸出される」ことは、「疲弊し切った農村の有り様を如実に物語」っていると述べる。そうした中で、もはや農作を続けることができない阿玉は、やがて主人公の父に「殖媒嫗〔使用人〕」<sup>34</sup> として売られ、その妾にならざるを得なくなる。そのことに気づいた場面で、主人公は以下のように独白する。

はけ口を見つけ出すことの出来ないこの反抗心は一層私を淋しくし、苦しめました。私は居ても立つても居られずに自分の部屋に駆けこみましたが、悩みは一層増して行くばかりでした。私は、人さらひによつて愛する人々から引き離されて嵐の中の山小屋に閉ぢ込められた時のやうに、不安と淋しさと憤りを一緒に経験しました<sup>35</sup>。

「淋し」さに耐えきれない主人公は「自分の部屋に駆けこ」む。そこで「嵐の中の山小屋に閉ぢ込められた」ような経験をし、「不安と淋しさ」とともに「憤り」を感じた。そしてこの感情は彼の「心に反抗を植えつけた」のである。隔絶された空間で「不安と淋しさ」を感じる瞬間が、現実への「憤り」へと転換され、主人公が植民地農村に発生する暴力とその背景に関心を抱く契機となる。ここで描かれる感情の動員機制は、「新聞配達夫」に「鬼畜のやうな主人」が想起さ

れているように、受難者と敵をそれぞれ措定して行うものであった。農村という美しい自然と女性に代表された受難者が、近代化と封建家族の人身売買によって圧迫される、という物語の筋は、旧来の家族制度を温存していた植民地農村だからこそ描写できるものである。

しかし、ここで描かれる農村空間は、本作の限界を同時に作り出している。『台湾新文学』において、藤原泉三郎が「『私』の感慨の中に作者が感傷的に溺れてしまつてゐるので、さつぱり娘の悲惨さがぴんと来ない」<sup>36</sup>と酷評したように、本作では知識人の「憤り」の効果に集中するあまり、被害者としての農村をジェンダー化して女性の位置に重ねてしまう。これは、感情動員の意味において有効かもしれないが、本当の被害者である阿玉の声を浮かび上がらせることができなかった。結局、本作は主人公が自分の部屋に閉じこもる最後の場面が象徴するように、閉鎖的な終わり方となっている。農村が本作において、行き場のない憤りを生成する場として機能したわけである。

楊逵は自作に対する批判をこと細やかにチェックする人物である。たとえば、「新聞配達夫」掲載時に複数の評者から寄せられた「形象化」が足りないという複数の批判を、楊は『台湾新聞』<sup>37</sup>で言及しただけでなく、自ら評者の一人である徳永直に手紙を送り、その返信の論文を『台湾文藝』<sup>38</sup>に掲載し、さらにその論文に対する反論をよそで展開している<sup>39</sup>。「水牛」に対するこの批判は、楊逵自身が主宰する『台湾新文学』に掲載されたため、彼が目を通した可能性は高いだろう。

「水牛」以降、彼は「死」（1935年4-5月）、「田園小景」（1936年6月）など、農村を舞台とした作品を継続的に発表した。これらの作品は、地主の雑用係や地主の息子を主人公にし、より精緻な舞台設定から、地主や植民地警察の横暴さを表現しようとした上で、結末に未来への希望を同時に残した。知識人の覚悟を中心に描いたこれらの作品は、「水牛」の設定を継承した上で正統的に発展させたと言えるが、その構図が維持されているゆえ、「水牛」において指摘されたマイノリティ表象の問題は、解決されたわけではなかった。その変化は、皮肉にも戦時期に現れるようになった。

### 第3節 農園のレトリック：「鷺鳥の嫁入」における「憐憫」と「妙な気持」

1930年代の楊逵は、農村を識字層向けに、悪を明確に措定し「憤り」を蓄積させる場所として描いた。しかし、1940年代になると、彼が描く農作空間は別の形に変わる。それは、台湾の創作環境と作家の生活が1937年を境に大きな変容を遂げたことと関連している。

この間に、新聞漢文欄の廃止や戦時動員体制の成立など、植民地台湾のメディア環境においても大きな変化があった。「憤り」の感情動員の戦略は、戦時下では遂行しづらくなっていた一方、植民地政府が明確に感情の動員を打ち出していた。たとえば、「ニコニコ運動」という、1942年前後の台湾に推進された戦時下プロパガンダキャンペーンがある。1942年の8月から9月にかけての『台湾日日新報』に展開された同キャンペーンは、「ニコニコしながら明るい気持で愉快に各自の職場で御奉公」<sup>40</sup>といった宣伝文句を掲げ、戦時下に「明る」さと「愉快」な「気持」

を持って「奉公」することも強く推奨した。そうすることで、「笑ひの裡に不自由や苦しみを忘れ、困難をも乗り切」<sup>41</sup> ののだという。「明るい」という言葉の意味は、台湾の「南方」としての地理的イメージ<sup>42</sup>とも重なり、感情動員の一環に組み込まれた。楊逵はこのキャンペーンの滑稽さを意識していた<sup>43</sup>が、「明る」さを全面的に強制する風潮のなかに、農村に蓄積する「憤り」を描く戦略は困難になった。

作家自身の文脈から言えば、前述のように、1937年に『台湾新文学』が停刊となった後、楊逵は逮捕と病を経験し、やがて入田春彦の援助のもと台中近郊に「首陽農園」を創設する。発表媒体を失ったこともあり、彼は1938年から1941年までに作品をほとんど公刊せず、耕作生活に打ち込んだ。農村を観察して描く作家から、自ら農作するポジションへと降りたのである。彼は「首陽園雑記」において、この経験を通して耕作生活の「詩情」<sup>44</sup>を発見したことを述べた。それは、「憤り」とはまったく異なる世界の接し方であった。

これらの要因が、彼の戦時期作品に現れる農園表象の背景となっている。その代表的な作品は、1942年10月号の『台湾時報』に発表された「鷺鳥の嫁入」であろう。「鷺鳥の嫁入」は、同年の「無医村」(1942年2月)と「泥人形」(1942年4月)につづいて発表された三作目の小説であり、文壇復帰以降、初めて農園生活自体をテーマとした小説である。

本作は、語り手の「僕」が、東京で経済学を勉強して社会運動に参加するが「年若くして死んだ」友人・林文欽との留学時代の思い出を語る前半部と、苗木と盆栽の商売をしている「僕」が地方有力者の病院院長に商品を踏み倒され、飼育していた一対の鷺鳥の片割れを失ったことが語られる後半部によって構成されている。後半において、メスの鷺鳥が取られたことと、残されたオスの鷺鳥が「——わが連れ合いよ、君は何処へ行つたのだ？／とでも言つて」いた様子で「嫁」を探す場面から、本作は動物の表象を借りながら、「水牛」と同じく農村における女性の人身売買を重要な要素として捉えていることがわかる。楊逵は30年代と40年代を通して、農村と深く結びつくものとして、このテーマに持続的な関心を持っていた。しかし、本作では農村と異なる感情の発露を描くことで、「水牛」とは異なる感情描写の戦略を取っている。そして、それを可能にしているのは、農園という場所である。

本作の序盤において、農園を経営する主人公が「年若くして死んだ友人林文欽君のところへ、十日間ばかり弔問傍々その遺族の面倒を見て帰つて来ると、花や野菜はすっかり草の中に包まれてしま」っている場面が配置されている。この「厄介極る雑草」に対して、主人公は「いまましい気持と、いまましい気持と、憤しい気持と、焦立たしい気持をごつちやにして、友人林文欽君のことを思い浮かべながら雑草をとつて行つた」(103頁)<sup>45</sup>。雑草は理不尽に畑を「占領」(103頁)するものとして表象され、それに対する主人公の憤りと怒りが描かれた。デンニツァ・ガブラコヴァの指摘によれば、文学表象としての「雑草」は、近代において、一方では生い茂る生命力を象徴しながら、他方では「原植生」の破壊や「攪乱」という世界の激変、都市化、震災、戦争<sup>46</sup>など、秩序を脅かすものに関連づけられ得る。雑草の描写を通して、本作はユートピアとしてではなく、「侵略」「占領」されつつある空間としての農園表象を提示した。農作の場を破壊するものとして、30年代の楊逵は「水牛」や「田園小景」において、近代的な道路や植民地警

察を設定していたが、「鷺鳥の嫁入」では、それが両面性を有する「雑草」に変わっているのだ。

たしかに、「雑草」という「侵略」者に向けられた感情には、「いまましい」、「憤しい」といったものが含まれている。しかし、ここで重要なのは「いたましい気持」、「焦立たしい気持」という、「雑草」自体を対象としていない感情も並列して描かれていることである。雑草が「百姓泣かせ」であるという記述があるように、「いたましい気持」と「焦立たしい気持」の対象は、「侵略」者自身ではなく、その被害を受ける「百姓」であった。この感情の対象の揺れは、「水牛」における加害者への憤りとは異なり、被害者への想像力が表れている。それを可能にしたのは、知識人および地主と農民の距離が明確な農村という場ではなく、知識人が自らを「百姓」と見做し得る農園という場であった。

雑草が農園に蔓延るようになったのは、主人公が「年若くして死んだ友人の林文欽のところへ、十日間ばかり弔問」をしたからであり、彼は帰宅後も「林文欽君のことを想ひ浮べながら雑草をとつて行つた」というように、農園生活の苦しさとの友人は作中において結びついている。林文欽は「漢学者」の父を持ち、自身も「滅私奉公」の観念を奉じながら、日本に留学して「計画経済」を研究していた。しかし、この「滅私奉公」の観念によって、地主としての林家は自らの唯一の収入である「小作料」を徴収しないまま、没落していく。最終的に、「先祖代々伝つた千石餘りの美田と家屋敷」の債務権を握った「〇〇会社の李専務」が、破産宣告の代わりにその一人娘に縁談を迫る。しかし、父が亡くなった後、林文欽はそれでも縁談を拒否し続け、破産となった。その後の彼は「水呑み百姓なみに、田植えもし、豚も飼ひ、鳥や家鴨や鷺鳥も飼ひ、薯や野菜も作つて僅かに糊口して来」（107-109 頁）で、貧困のなかで死んだのだという。主人公は彼に「哀れであつた」という気持ちを抱く。

理想を捨てることができないまま亡くなった殉教者として描かれている林文欽に対し、生計のために「東京での経験から、僕はそれ〔専攻していた芸術学〕をあつさりふり捨てて、苦力になり、土方になりして、七転八倒した」（105 頁）という主人公は、テキスト後半にみられる細やかな金銭の計算などから、農園を通して「商売」をしている生活者の側面が強調される。テキスト後半の中心テーマは、その生活におけるさまざまな苦勞である。

そのなかに、主人公の子どもたちが黍の穂を持ち、争って喰おうとする家鴨たちに餌を与える場面が設定されており、「最も勇敢にとび上がつて引き抜いた」鴨が「そのためにしたたか地面に身体を叩きつけ……踏みつけられ……やつと立ち上がつて見ると獲物はすっかり他のものに奪はれつくされ」たという場面をみて、主人公が「林文欽君とその父林翁のことを思ひ出さざるを得ず、すっかり憂鬱になつてしまつた」（110 頁）という描写がある。前半部で雑草に荒らされる植物に喩えられた林文欽は、ここでは子供のいたずらに遭う鷺鳥と重なる。注目したいのは、以下の独白である。

飼料がないので、こんなものを飼ふ気は、僕には初めから全然なかつた。が、肉に餓えてゐる子供達は、こうして幾羽か飼つてゐると、何時かそのうまい肉にありつけると言ふ希望をもつことが出来て……

けれども、鶯鳥の方は、草さへあれば喜んで喰ふし、それで大きくもなるので、大変助かると思つた。子供達は、学校から帰つて来ると、僕がとつた草をかき集めてやつたり、原っぱから刈つて来てやつたり……すつかりいいお友達になつてゐた (111 頁)。

鶯鳥は「うまい肉にありつける」ために飼われたものでありながら、主人公がかき集めた雑草を主な食糧としている。言い換えれば、作品の冒頭部に「侵略」者として描かれた雑草は、ここでは鶯鳥の飼育に必要なものとされている。本作のなかにおいてだけでも、雑草は場面によって異なる役割を持つものとして描かれる。それは、雑草を侵略者として措定する時の意味の境界が、容易に揺らぐことを意味している。また、雑草の被害者である農作物になぞらえられた林文欽もまた、ここでは雑草を食する鶯鳥のポジションに重ねられ、異なる意味を付与されている。「鶯鳥の嫁入」の主人公がみている農園世界の登場者たちは、文脈によってその役割が変動し、循環する。悪を明確に掲げる 1930 年代の作品とは、異なる関係性がここに描かれている。

それゆえ、結尾部において、「院長」が主人公に植木を発注したにもかかわらず料金を支払わず、主人公が子供たちにかわいがられていた一对の鶯鳥のメスの方を差し出すことで、ようやく問題が解決しかけた場面は、きわめて象徴的である。

帰り路、僕は如何に残つたその金を握つて妙な気持であつた。

金三十円也を……これはもうけたのではなくて、いはば損を免れた金であるが……僕は助かつたと思ふ一面、決して晴々としたものでもなかつたことは確かであつた。が、長いかつてたつと果した仕事の後のやうに、ほつとした気持は確かにあつた。(121 頁)

この「妙な気持」は、「金」を得て生活を維持できたことによって生まれる「ほつとした気持」と、そのために犠牲となった動物への「晴々とし」ない後ろめたさが混ざり合ったものである。この場面に悪を措定する志向は顕著ではなく、むしろ生活の継続に対する安心感と、鶯鳥に対する後ろめたさが前面に現れている。悲劇的な場面設定やカタルシスが描かれておらず、動物、植物、家族そして市場のさまざまな関係に絡め取られた主人公は、あくまでも中途半端な解決によって生き延びていく。しかし、この中途半端さは、たとえば雑草の両義性が表すように、単一の価値判断に収斂することから逃れるきっかけでもあつた。悪への告発よりも、犠牲となったものへの憐憫が際立つこの作品は、その意味において、1930 年代とは異なるリアリティを表現している。

憐憫は、楊逵が戦時下の言説空間に置かれ、発言しなければならない時に運用されるレトリックでもあつた。たとえば「鶯鳥の嫁入」の翌月号の『台湾時報』に掲載された「大東亜文学者会議に際して」(1942 年 11 月)という、公式の宣伝に則るエッセイを寄稿した時、楊逵は「大東亜共栄圏の建設は……各民族、各地方の文学者が一堂に集まつて……隣びん〔憐憫〕と信頼の感情をもつて結び合はされ」<sup>47</sup> なければならないと主張し、皇民化を高らかに唱える「大東亜共栄圏」論とは一線を画した。犠牲者への配慮は、彼が煽動的な宣伝に走らなかった一つの理由かもしれない。

農園を通して描かれた憐憫の姿勢は、彼の戦時下の文芸理論構築にも無関係ではない。翌年の1943年に、彼が「糞リアリズム論争」において、「糞」という単語を排除すべき排泄物として捉えずに、重要な役割を持つものに転換させた。そこにも敵を措定することとは異なる論理が働いた。

#### 第4節 「糞リアリズム論争」の時代：蔑称の転化における農の意義

ここまで、楊逵が「鷺島の嫁入」において、敵の措定とは異なる姿勢と、農園における生の循環を描いたことを確認した。本節では、翌年に発生した「糞リアリズム論争」に関する楊逵のテクストを中心に、彼が日本人作家との論争において、どのように農の思考を創作に取り入れたのかを明らかにする。

この論争は、在台日本人作家の西川満が「文芸時評」（1943年5月）において、台湾人作家における作品テーマが「継子のいぢめか、家族の葛<sup>マ</sup>闘<sup>マ</sup>など」の「風俗描写」ばかりで、「欧米模倣の糞リアリズム」であると批判したことをきっかけに始まった<sup>48</sup>。西川の議論を受けて、台湾人作家の張文環（「台湾文学雑感」1943年5月）や吳新榮（「良き文章・悪しき文章」1943年5月）などが次々と反論を発表し、張文環が主導する雑誌『台湾文学』と西川が主宰する雑誌『文藝台湾』間の論争にまで発展した。

先行研究では、総動員体制において台湾人作家たちが帝国日本に示した抵抗として、この論争を評価することが多かった。たとえば、この論争が研究上で初めて着目された1990年代後半に、曾建民は「この論争は日抛末期の台湾文学の真像を記録している。それは台湾文学を圧迫する皇民文学の勢力の醜い面を暴露し……多くの台湾作家が日帝敗北の二年前でも、台湾文学の現実主義の精神を以て皇民文学勢力に対抗し続けていたことを疑いもなく証明した」<sup>49</sup>としている。

他方、2000年代以降、こうした「皇民文学か抵抗文学か」の二項対立を克服しようとして、帝国の中心と周縁をめぐる図式を打ち出す議論が多く現れた。たとえば、黃惠楨は西川の言説の背後にある「南進思想」に注目し、外地文学として台湾文学を眼差す視線への抵抗を読み取り<sup>50</sup>、林巾力「欧米模倣の糞リアリズム」という西川の指摘を重視し、戦時下日本における西洋批判、近代の超克の視点から論争を捉え直し<sup>51</sup>、張惲璇はこの論争を戦後にまで発展する台湾のリアリズム文学の流れから捉え、宗主国に同一化できない植民地のリアル、すなわち「差異」を見出した<sup>52</sup>。これらはすべて、中心に同化されない植民地台湾の「差異」に、同一化を強いる権力に対する抵抗を見出そうとする試みであろう。ナショナリズムからではなく、帝国の権力構造のなかに置かれた台湾の位置から植民地的差異を見出すこの視点は、現在でも有効であろう。

他方、垂水千恵は、1930年代の日本文壇においても発生した「糞リアリズム論争」との関係や日台におけるプロレタリア文学理論の受容関係を指摘した。1933年の日本における左派文学者弾圧の後、「転向」した作家たちが過去のように自由に創作できずに、故郷や家族など私的領域のテーマに回帰する中、それを克服すべく「社会主義リアリズム」の議論が導入され、「主題の積極性」という過去のスローガンをいかに調整し、「ネガティブ」<sup>53</sup>な現実を反映するのが、

同時代のプロレタリア文学者にとってもきわめて重要な問題であった。1936年において、『日本浪漫派』の林房雄が『人民文庫』を主宰する武田麟太郎らの作品を「糞リアリズム」と批判したこと<sup>54</sup>は、まさにこの問題系から理解できるだろう。垂水の視点からすれば、戦時下台湾の「糞リアリズム論争」は、むしろこうした日本と台湾で繰り返される論争のパターンであり、「単純に日本人対台湾人の民族的対立」に還元できない「プロレタリア文学運動崩壊以降の二つの異なる方向性」<sup>55</sup>にかかわる問題でもある。

この二つの評価方向は、互いに重なり合いながらも、それぞれ異なる歴史記述の形を示している。前者は差異と抵抗を打ち出し、後者は受容と連帯を強調する。他方、先行研究では楊逵のレトリック使用に踏み込むことが少なく、「糞リアリズム」と「ロマンティズム」の対立の図式が議論の前提となっている。しかし、たとえば、泉鏡花の浪漫主義を推奨する西川満を始めとする『文藝台湾』の論者は、「頹廢的な欧羅巴ロマンティズム」<sup>56</sup>や「頹廢的な浪漫主義」<sup>57</sup>を同時に否定しており、一概に「ロマンティズム」概念だけで西川の主張を括ることが難しい。他方、リアリズムを擁護する『台湾文学』の楊逵「糞リアリズムの擁護」も、「リアリズム」の必要性を訴える論文でありながら、「ロマンチズム」<sup>58</sup>を一面的に否定しているわけではない。この論争は「リアリズムかロマンティズムか」という対立を軸に展開しながら、その境界線は明確ではなかった。この論争において楊逵が重要なのは、彼が両者を横断する論理、すなわち否定を肯定に反転する論理を示したからである。そして、彼のそのような論理は、まさに農作の場面と「百姓」の身体感覚を媒介にしているのである。

糞リアリズム論争の最中で、伊東亮というペンネームで発表された「糞リアリズムの擁護」(1943年7月)において、楊逵はまず、火野葦平「糞尿譚」(1937年4月)と島木健作「生活の探求」(1937年10月)を例に挙げながら、「人が顔をそむけ、人が鼻を押へる糞」なくして農作物は実らないと指摘したうえで、そこに「真実の百姓精神」を見出し、「糞にはロマンはない」と断言する。「人が顔をそむけ」たくなるほどのものではあるが、農民が生活するうえで避けては通れない「糞」は、生活の苦しみを反映するものであり、そこに「ロマン」を見出す余地はない。

しかし、議論を進める中で、彼は上述の主張は「片一面」の話でしかない打ち消し、「糞をやつたあとの艶々と光る葉菜……は何と裕かなロマンではないか」と述べ、「否定面に鬱積せる肯定的な要素を培養し……否定面を肯定面に転換せしめる」必要を指摘した<sup>59</sup>。理論の展開に従い、「糞」は、単なる悲惨さの象徴だけではなく、農作において必要とされている「肥料」の側面を帯び、両面的な概念となる。

そうであるなら、楊逵の「糞リアリズム」は、「否定面」を象徴する「糞」の再現と、それを「肯定面」へと「転換」する機制とみることができよう。この転換の方法論は、「否定面」を強調する1930年代の農村描写に、「肯定面」へと接合される契機をもたらした。それは、「鷺鳥の嫁入」にみられた、侵略者と食糧の両面性を有する雑草に通ずるものであり、循環的な生態系をめぐる世界観を背景にしている。また、この論法の比喩は農作の現場を踏まえたものであり、西川らが使用する「糞」という言葉とはまったく異なる文脈に属していたのだ。

「糞」という言葉は、近代日本語においても長い歴史を持つ表現であった。この概念は、明治

から大正にかけて、正岡子規らの新しい俳句論の対象<sup>60</sup>として取り上げられ、既存の美的価値から排除され、取るに足らないと思われるものに、敢えて美を見出すというリアリズムを象徴するものであった。昭和初期では、「糞批評」などの造語とともに、プロレタリア文学者に対する蔑称<sup>61</sup>として多用された。西川満が「糞リアリズム」という蔑称を使用したことの背後には、この文脈を想定できる。西川の批判は、昭和前期のプロレタリア文学者批判を踏襲しつつ、戦時下の西洋批判を織り込んだ議論と位置づけられ得る。この場合、「糞」は接頭辞として使用され、続く名詞の価値を貶め、無意味さを強調する機能を持つ。また、彼は「糞リアリズムは、全く明治以降に日本に入つて来た欧米的な文学手法」とも述べており、明治文学における対立も意識している。泉鏡花を「日本の伝統を生かした大作家」として評価する西川は、明治期に始まる日本文学のロマンティズムとリアリズムの対立を、戦時下の台湾に当てはめようとした。

他方、台湾における台湾話文や白話文などの漢文作品において、「糞」を意味する「屎」（シー／サイ）という言葉は蔑称でもあるが、それを逆転させ、諷刺的な意味を持たせる試みもなされてきた。たとえば、「放屎百姓」という言葉は、30年代に活躍した漢文作家・蔡秋桐のテキストに頻繁に現れ、作品のタイトルにもなった。愚直な農民が騙され、官民一体の事業に搾取されることを描く「放屎百姓」（1931年4-5月）や、植民地政府を推進する「美化政策」がいかに「放屎百姓」に負担を強いたのかを描く「奪錦標」（1932年7-8月）と「理想郷」（1935年6月）などの作品は、「美」によって犠牲になった、「屎」に象徴される民衆の苦しみを強調した。楊逵の未発表の掌編「田植競争」においても、「二等車に寛いで」田植えをする農民に「皇民諸君」と呼びかける、「陣頭指揮」に向かう知識人たちが風刺的に描かれている。「百姓達は目もあげないで泥をとばしながらせつせと働いてゐた」中、「水牛が尾をふり上げ」、その場にいる全員に「糞をかけた」。「目ぶたにぶらさがつた泥塊にも無神経で黙々と励む」農民と相対的に、知識人は「駄目だ。俺は文学者なんだ。糞リアリズムは御免蒙りたい」<sup>62</sup>と答える。この対比を通して、楊は台湾における「糞」の表象と農民との繋がりを再現しながら、「泥まみれの服の悪臭」を描くことで、「糞」に人間の身体感覚や感情を触発する契機を与えた。

楊逵と西川の対立を軸にこの論争を考えると、この文脈の相違が両者の議論が交わらない理由の一つと考えられる。「糞リアリズム擁護」において、楊が過去に読んだ「帰農した将軍が糞尿の腐熟を計るかに手を突込んで嗅いで見た」<sup>63</sup>場面を例に挙げる時、「糞」という言葉は、単なる罵倒的な接頭辞を超え、嗅ぐことによって得られるリアリティを含意する言葉へと変容した。この身体性は農作生活に裏づけられているものであるゆえ、否定するだけにとどまらず、生活維持のために「肯定面」へ転換されなければならない。この転換の論理は、論争において独特な存在感を発揮した一方、戦争後期における彼の農園表象の変容にも繋がった。

## 第5節 戦争末期の農園：ユートピア描写から主体の変容へ

農作の場面を肯定的に捉えようとする傾向は、戦争後期の楊逵作品において、しだいに前面に現れてくる。「糞リアリズム擁護」で展開された理論は、彼の同時代の実作とも連動していたが、

論争以前の1942年11月に発表された「芽萌ゆる」には、すでにユートピアとしての農園像が描かれている。この作品は、病気療養のために家を留守にしている夫に向けて、妻が書いた書簡の形を取った小説である。

作品の冒頭には、まず「今のあなたの身体で、何か書かうと言ふことは、わたし賛成できませんわ！……今のあなたにとって肉体的に到底、耐へられないことと思ひます」と、夫に療養に専念するように伝えた後、「色々の花の咲き乱れた花畑の真中に、小ぢんまりとして藁葺の、夏は涼しく、冬は暖い書齋を作ります」<sup>64</sup>と、夫が留守にしている時に始めた農園と、それを通して実現したい「夢」を発見したと語る妻が描かれる。本作において、文学創作は「肉体」に深く結びつくものとして提示されており、この引用でみられる農園の書齋という理想は、まさに労働と創作の融合を体現しているものであろう。この理想を抱きながら、語り手である妻は農園仕事の「愉しさと晴々しさを味ふことが真実に出来」るようになり、「もう嵐が来ようが、雨が降らうが、わたしはゆつたりと構へてお快癒をお待ちすることが出来る」<sup>65</sup>と述べている。ここでの農園は、労働と創作の夢が実行される場所で、「嵐」を逃れる避難所でもあった。

農作の場自体を「夢」として語ることは、それ以前の楊逵作品にほとんどみられない傾向である。「水牛」から「鷺鳥の嫁入」までのような陰鬱な現実描写とは異なり、戦争後期になるにつれ、彼は糞リアリズム論争で宣言したように、少しずつ明るい理想としての農作の場を描くようになった。

戦時下にかかれた未発表の原稿で、楊は「私の作品が暗い」との批判に対する反論として、「時局柄、明朗なる作品の要望されることは当然である」と理解を示しつつも、表面的に「ドンチャン騒ぎ」を描いても、「あとから来る暗い印象を読者に与へるならば、決して明朗な作品とは言ひ難い」と述べた。そのような作品の代わりに、「苦難を一つ一つ踏み越えて行く強靱なる精神」こそが、「長期戦を覚悟しなければならない今日」に求められる文学創作の姿勢であると述べている<sup>66</sup>。「長期戦」に持ち込まれた「時局柄」への言及から、戦時下の言説空間が意識されていることがわかる。その言説空間のなかで、「明朗な作品」が求められていることに理解を示しつつも、「ドンチャン騒ぎ」とは異なる「明朗」のあり方を要求した。

「芽萌ゆる」以降にみられる農園の理想像は、まさにそれに対する試みと言える。「ドンチャン騒ぎ」として描かれませんが、「暗い印象」を読者に与えるものではない。本作に描かれる「嵐が来ようが、雨が降らうが」、どんな「苦難」をも農作の労働を通して「踏み越える」精神は、糞リアリズム論争前後に、楊逵が辿り着いた戦時下思想の帰着点である。「糞リアリズム擁護」で言及された「肯定面」への転換は、このような形で実作に反映されていく。

この農作の場を理想化する精神は、労働と深く結びついており、労働を通して農作者の主体が変容することで初めて可能になるものである。「芽萌ゆる」の語り手が、「十年ばかり続きました女給生活のしみは、一部は花作りを始めましたお蔭で洗はれ、残部も、この僅か十日間ばかりのラヂオ体操会で、すっかり洗ひ落されたやうな気が致します」<sup>67</sup>と述べているように、本作では過去の都市生活の習慣、すなわち「女給生活のしみ」が、「花作り」を通して浄化されていく過程が語られている。戦争後期の楊作品に描かれた農の理想は、単なる場所への憧れにとどまらず、

このように主体の変容とも密接に結びついていた。

「芽萌ゆる」という言葉は、その後出版される予定の短編集のタイトルにもなったが、戦時下では発刊できなかった。戦後の1946年に、『芽萌ゆる』に収録された作品の一部が『鶯鳥の嫁入』と題する作品集に収録され、初めて出版された。『芽萌ゆる』に収録されたほかの作品にも、農村をユートピアと捉える世界観が色濃く現れている。たとえば、短編「帰農の日」（初刊1946年、戦前未発表）は「企業整備で十年近く勤めて来た雑貨店が、愈々閉店することになった」夫婦が農村に戻り、農民と交流していく中で農作者として生きていくことを決意する物語である。農民たちの親切さに触れる中、主人公は、「健全なる精神は健全なる身体に宿る……利己主義の不健全な精神……有利に立ち廻らうと言ふ不健康な肉体に芽生える」ことを悟り、「根からの百姓は、決して米や薯が不利だからと言つて、それを止めるとは言はぬからな」と、利害を思想の基盤に置かない農作者の主体性に理想をみる。「ほんとのその根からの百姓になれるのかしら」と変容に戸惑う妻に、主人公は「決心と言ふか、覚悟といふかさう云ふものがなくてはいけないな」と諭す<sup>68</sup>。ここでも、「毎日毎日金をいぢつてみると、ほんとに人間は腐るな」という都市人の主体性が、労働を通して変容されなければならない、という当時の楊の思想が表現されている。

他方、理想への変容を主題として設定するためには、同時に、変容すべき不完全な人間を提示しなければならない。「芽萌ゆる」における病弱な夫や、「帰農の日」における戸惑う妻は、まさにその現れである。そして、この不完全さが、語り手の作家自身に反映されるようになった作品として、「増産の蔭に」を挙げられる。

「増産の蔭に」は、「台湾総督府情報課委嘱作品」として、1944年8月の『台湾文藝』に発表された作品である。報告文学の形を取っており、炭鉱労働者を視察する作家が自らの所感を述べるものとなっている。「私の臆病風を吹き拂ひ、私を元気つけ、鋼鉄が鍛へられることに依つて益々堅くなることを、卑近な生活で以つて私に教へて来た、正しく私の先生であつた」<sup>69</sup>といった独白が随所に含まれるこの作品において、張季琳が指摘した通り、楊逵における大衆と知識人をめぐる態度は、1930年代に比べて、「内から外へ」から「外から内へ」という方向転換を遂げ<sup>70</sup>ている。知識人は、大衆を動員し、働きかける側から、労働者に教を乞う位置に置かれた。「増産の蔭に」と同号に掲載され、炭坑視察の経験を元に書かれた短文「労働礼賛」において、彼は炭坑労働者の「あのひきしまつた体軀、もり上つた胸や両腕の筋肉」に圧倒された経験を述べ、自身が「勤労者の美しさに憧れをもつてゐる」<sup>71</sup>と認めている。農作以外に対しても、労働の理想化が現れているのである。

農の理想への憧憬は、本作が発表された時点では、労働者への賛美と重なるようになった。実際、本作のなかには語り手の「野菜作り」の経験が、自らとかけ離れているはずの炭鉱労働者たちと自身を結びつける媒介として提示されている。主人公が炭坑の糧食自給の計画に対して協力を求められると、「鉱山従業員の自力による集団耕作」のために「蔬菜の設計を色々立て」ながら、「石炭とは一見関係のない、蔬菜生産についても、私は重大な責務を負ふて来た」<sup>72</sup>と自覚する。

「生き延びる」<sup>73</sup>ための農園は、ここでは労働賛美の思想を介して、国家動員と労働者の役に立

つものへと変容する。それゆえ、首陽農園はすでにその名の通りに孤立の抵抗の場として維持できなくなった。1944年6月に発表された「『首陽』解消の記」において、「総蹶起の末席を汚した私は『首陽』を解消し、『帰農者のために、蔬菜作りを始める人々のために』<sup>74</sup> 自らの経験を農民のために生かそうと宣言する楊逵の言説は、別の角度から首陽農園が自閉的なものであり得ないことを裏づけた。農園の「解消」という事態は、単なる戦時協力や転向というより、肯定性と否定性の間に揺れる彼の農園をめぐる思想の文脈から、理解すべきだろう。

## 第6節 結論

本論は、楊逵の農民文学に現れる肯定と否定の両面性から出発し、「農」の視点から彼のテキストを読解した。1930年代における農村表象は、ローカルで閉鎖的な空間でありながら、「憤り」が蓄積する空間として描出された。そのため、女性表象などをめぐる限界が存在した。他方、言論空間がさらに圧迫された1940年代に、楊逵は首陽農園を創設し、異なる関係性が成立する農作空間を描いた。

「鷺鳥の嫁入」に登場する農園空間は、雑草に荒らされながら、雑草によって家畜を飼育するという、「侵略者」を固定的な視点で捉えない場所であった。そのような場所で、否定的で攻撃的な「憤り」の代わりに、被害者に対する「憐憫」が注目された。また、1943年の糞リアリズム論争では、農作に付随する身体感覚に裏づけられた「糞リアリズム」が主張された。戦時下のこの一連の実践を通して、楊逵はより繊細な方法で植民地の現実を表象しようと試みていたが、農作の「肯定面」を発見しようとする彼の姿勢は、やがて否定すべきものを自身の内部に収斂させ、その外部の労働者を肯定する論理へと展開していく。それが戦争末期の農民賛美、労働賛美のテキスト、そして首陽農園の「解除」へと繋がった。

戦後初期の混乱のなかで、楊逵は1945年に『一陽週報』を、1946年に戦時期の作品をまとめた日本語作品集『鷺鳥の嫁入』を、1948年に雑誌『台湾文学叢刊』を刊行するなど、早い段階で文学活動に力を入れた。また、「新聞配達夫」「模範村」など自身の作品の中国語訳を外省人作家に依頼し、自ら郁達夫など中国作家の作品を日本語に訳すなど、外省・本省の作家を架橋する試みを行った。帝国日本の検閲が過去となった1947年に、彼は「八年抗戦の中、日本特務の監視と脅迫のもとで、私は首陽農園に隠れ、餓死もしくは投降を免れた」<sup>75</sup>と述べ、植民地期の「首陽農園」を再び抵抗の拠点として捉え直した。

しかし、楊逵が戦時期にかけて試みてきた身体性や「憐憫」への注目は、この時期において、敵の指定といった単純な論理に回帰したわけではない。外省人作家の台湾人に対する先入観のなかで展開された「第二次郷土文学論争」のなかで、楊逵が「この議論、この運動は、もちろん「分離」「対立」のためのものではない。言うまでもなく、「互いへの争奪」でもない」<sup>76</sup>と述べているように、戦時期に見出された農園をめぐる倫理は、彼の戦後の言説のなかにも痕跡を残した。

1970年代以降、楊逵は日本の帝国主義に対する勇敢な抵抗者として、再び台湾文壇に注目されるようになる<sup>77</sup>。しかし、彼の文学はけっしてその一面だけを表現してきたわけではない。本

論は「リアリズム／ロマンティズム」「肯定／否定」「抵抗／協力」といった二分法で静的に楊逵のテクストを分類するのではなく、これらの二項が戦時期に至る楊逵作品に交互に現れることを分析した。戦時期に彼が述べた「哀れなる性格の分裂」<sup>78</sup>という自嘲の言葉は、抵抗作家の像とは異なる彼の一面を表している。その側面は、このような作業を通して捉え直すべきであろう。

## 追記

本論は第26回日本台湾学会学術大会での発表を元に作成したものである。当日コメントをくださった先生方、査読者の先生方、ならびに資料収集の際に便宜を図ってくださった国立台湾文学館、神奈川近代文学館に感謝を申し上げます。

## 注

- 1 葉石濤「農村婦女哀史一評《轉燭》」、葉石濤『台灣文學的困境』派色文化出版社、1992年、129頁。
- 2 洪鵬程「台灣農民小説發展研究（一九二〇～一九九〇年代）」中國文化大學博士學位論文、2014年、1-4、144-150頁。
- 3 張恆豪「無產者の輓歌——楊守愚集序」、張恆豪編『楊守愚集』前衛出版社、1991年、13頁。
- 4 黃惠禎『左翼批判精神的鍛接 四〇年代楊逵文學與思想的歷史研究』威秀資訊、2009年、432頁。
- 5 山田清三郎『近代日本農民文学史 下』理論社、1976年、96-103、206-211頁。
- 6 安志那『帝国の文学とイデオロギー 満州移民の国策文学』世織書房、2016年、158-159頁。
- 7 鍵田研一「今後の農民文学」、農民文学懇話会編『土の文学作品年鑑』教材社、1939年、399頁。
- 8 安前掲書、146-149頁。
- 9 森山啓「文学の新世代」、農民文学懇話会前掲書、379-387頁。
- 10 代表的なものとして、「新文学管見」（1935年7-8月）に登場した「真実なるリアリズム」を挙げられる。この概念は、横光利一の「純粋小説論」をめぐる論争のなかに提出され、自然主義的な「私小説心境小説」を批判するものであった。謝惠貞『横光利一と台湾——東アジアにおける新感覚派の誕生——』ひつじ書房、2021年、30-33頁を参照。
- 11 楊逵は1937年に「報告文学に就て」（『大阪朝日新聞 台湾版』1937年2月5日）、「報告文学とは何か」（『台湾新民報』1937年4月25日）、「報告文学問答」（『台湾新文学』1937年6月）など複数の報告文学論を展開していた。
- 12 楊逵「台湾文壇の近情」『文学評論』第2巻第12号、1935年、137頁。
- 13 楊逵「輸血」『日本学芸新聞』第35号、1937年7月10日、6面。
- 14 楊逵「文学と生活」『星座』第3巻第8号、1937年、64頁。
- 15 楊逵「輸血」、前掲紙、6頁。
- 16 張素玢の研究によれば、日本の植民地台湾への農業移民事業は1909年の花蓮港移民に始まり、1930年代以降は試験的に台湾の中部、南部、東部に移民村を展開していた。後期の移民は日本の南進政策とも深くかかわっていた。張素玢『未竟的殖民：日本在台移民村』衛城出版、2017年、76-92、160-170頁を参照。
- 17 満洲国に越境する台湾人をめぐる許雪姬の研究は、「台湾人は満州で新京に居住した者が最も多く……大連と奉天もまた重要な拠点であった。新京の滞在者が政府機関で勤務していたか就学しており、大連や奉天に滞在した者は、医療や商売に従事したか、就学した者が多かった」とまとめている。台湾からの農業移民の事業が施行されなかった。許雪姬『離散と回帰 「満洲国」の台湾人の記録』東方書店、2021年、65頁。
- 18 たとえば、趙圓は、「遺民史」の論述はつねに「商周の際」を起点としていることを指摘し、伯夷、叔齊とその同時代人は「朝代の更迭の際における君主から臣民まで」あらゆる人物像を網羅しているゆえ、後世の遺民たちもまたこの歴史を繰り返し引用し、自らの経験の歴史化を試みていたと論じた。趙圓『明清之際士大夫研究 作為一種現象的遺民』昌明文化、2017年、15-16頁。
- 19 中国語圏の近代文学研究において、遺民という概念は政治環境の大きな変容に取り残される者の表象を分析する際に用いられることがある。たとえば、王徳威は「台湾割譲以来の台裔文人作家は、丘逢甲から鍾理和まで、ほとんどすべての世代にわたってさまざまに異なる遺民のアイデンティティを思考し、刻み、そして創造した」として、この概念をもとに、台湾の作家を始めとする現代中国語文学を分析した。王徳威『後遺民寫作』麥田出版、2007年、11頁。

- 20 たとえば、楊逵「日本殖民統治下の孩子」(『聯合報 副刊』1982年8月10日、8面)、「沈思、振作、微笑」(『自立晚報』、1984年4月30日、10面)、廖偉竣「不朽的老兵 與楊逵論文學」(『師鐸』第4期、1976年1月、38頁)などの回顧録やインタビュー記事に、農園設立は日本に屈服しないための行動である旨の発言が残されている。
- 21 陳淑容「失落的「新村」？楊逵、田中保男和入田春彦の文學交誼與思想實踐」『臺灣文學學報』第18号、2011年、109-133頁。
- 22 楊逵「首陽園雜記」、彭小妍主編『楊逵全集第十四卷』國立文化資產保存研究中心籌備處、2001年、478頁。初出は『台灣新聞』1937年3月30日-4月2日。
- 23 楊逵「一台灣作家の七十七年——五十年ぶりの来日を機に語る」『文芸』第22巻第1号、1983年、306頁。聞き手は内村剛介と戴國輝である。
- 24 「広告 園芸見習募集」『台湾文学』第2巻第2号、1942年、83頁。
- 25 『台湾日日新報』は、少なくとも1935年1月14日朝刊の「基隆市民農園で／各種果樹類試植」と題する記事を始めに農園に関する報道を始めた(2面)。たとえば、1936年12月13日朝刊の「台北に開設された市民農園(上)」には、「都会人は……乾燥無味な生活に一脈の潤ひみとユトリを培はねばならぬ／この意味に於て本年2月18日から……開設された台北市農園は市民のオアシスともいふべき使命を以て生まれた訳である」との記述もある。(3面)
- 26 たとえば、台湾東部の先住民族を対象とする芭蕉生産計画の実行を際に、技術を指導するために「指導農園」が花蓮に設置された。「指導農園を設置 高砂族に対する授産研究のため 花蓮港廳下数ヶ所に」『台湾日日新報』1937年6月4日朝刊、5面を参照。
- 27 「広告 園芸見習募集」、前掲書、83頁。
- 28 楊逵の戦後の回想には、盗難に遭った農具の情報を彼を監視していた警察が知らせてくるなど、農民としての楊に好意的な態度を示した一面も綴られている。楊逵「光復前後」『聯合報 副刊』1980年10月24日、8面を参照。
- 29 安達巖「糧食持久戦争と帝都周辺の開発(上)」『栄養の日本』第11巻第4号、1942年、2-4頁。
- 30 楊逵「新聞配達夫」、前掲書、231頁。
- 31 楊逵「文芸批評の基準」『台湾文藝』第2巻第4号、1935年、22頁。
- 32 楊逵「お上品な芸術観を排す」『文学評論』第2巻第5号、1935年、164-165頁。
- 33 垂水千恵「台湾人プロレタリア作家楊逵の抱える矛盾と葛藤について」『國文學：解釈と教材の研究』第54巻第1号、2009年、46-47頁。
- 34 戦後の回想によれば、楊逵は18歳前後の時点から、結婚対象が家族によって決められることに大きな違和感を感じ、自由恋愛や台湾における女性の待遇に問題意識を抱いていたという。楊逵「我的回憶」『中國時報』、1985年3月15日、8面。
- 35 楊逵「水牛」『台湾新文学』第1巻第1号、1936年、18頁。
- 36 藤原泉三郎「顧慮なく評す——台湾新文学創刊号の作品評——」『台湾新文学』第1巻第2号、1936年、50頁。
- 37 「新聞配達夫 楊逵君の作品に就て＝文芸評論十月号掲載＝」、彭小妍主編『楊逵全集第九卷』國立文化資產保存研究中心籌備處、2001年、83-85頁。初出は『台灣新聞』1934年10月24日。
- 38 徳永直「形象化について」『台湾文藝』第2巻第2号、1935年、13-14頁。
- 39 楊逵「楊肇嘉論」、彭小妍主編『楊逵全集第九卷』國立文化資產保存研究中心籌備處、2001年、182-183頁。初出は『台湾新民報』1935年5月、日不明。
- 40 「みんな揃つてニコニコ運動」『台湾日日新報』1942年8月21日夕刊、2面。また、この運動は1941年前後日本において展開されていた「笑和運動」とも類似性がある。大塚英二『大政翼賛会のメディアミックス』平凡社、2018年、174-184頁などを参照。
- 41 「こちらがゝ笑、へば 相手も笑ふ、笑つて乗り切れ長期戦」『台湾日日新報』1942年9月9日朝刊、4面。
- 42 生田花世『明るい台湾の生活』は戦時下によく生産された動員作家の台湾旅行記の一つであるが、「南方は明るい。そしてあつい。」といった地理的景觀が、「皆さんが太陽のめぐみのうすい内地の東北、北海道、樺太のことを考へて下すつて、この天恵を他人にもわかつといふ協力の御心を」持つべきだという「大東亜共榮圈建設」への動員と結びつくことが窺える。生田花世『明るい台湾の生活』婦人之家社、1942年、20、80頁。
- 43 たとえば、楊は戦時下で発禁となった短編小説「笑はない小僧」において、この運動を風刺的に言及したことがある。楊逵「芽萌ゆる」未出版、国立台湾文学館所蔵、1944年、47-48頁。
- 44 「首陽園雜記」では、「土をいぢる時、種子を蒔く時、水や肥をやる時、雑草をつむ時、老百姓と閑談する時など、それはそれなりに豊かな詩情がある」との記述がある。楊逵前掲論文、483頁。

- 45 楊逵「鷺鳥の嫁入」『台湾時報』第274号、1942年。以下、同文の引用は（頁）の形で示す。
- 46 デンニツァ・ガブラコヴァ『雑草の夢——近代日本における「故郷」と「希望」』世織書房、2012年、iii頁。
- 47 楊逵「大東亜文学者会議に際して」『台湾時報』第275号、1942年、119頁。
- 48 西川満「文芸時評」『文藝台湾』第6巻第1号、1943年、38頁。
- 49 曾建民「評介「狗屎現實主義論争」——關於日據末期の一場文學鬥争」、曾健民編『喋啞の論争』人間出版、1999年、120頁。
- 50 黃惠禎「楊逵與糞現實主義文學論争」『台灣文學學報』第5期、2004年、220頁。
- 51 林巾力「西川満「糞現實主義」論述中的西方、日本與台灣」『中外文學』第34巻第7期、2005年、155-158頁。
- 52 張俐璇『解構與流變：「寫實主義」與台灣小說生產』秀威資訊、2016年、155-161頁。
- 53 徳永直「創作方法上の新転換」『中央公論』第48巻第9号、1933年、226-227頁。
- 54 林房雄『浪漫主義のために』文学会出版部、1936年、182-187頁。
- 55 垂水千恵「「糞リアリズム」論争の背景——『人民文庫』派批判との関係を中心に」、中山昭彦ほか編『文学の闇／近代の「沈黙」』世織書房、2003年、420頁。
- 56 西川満「文芸時評」、前掲書、38頁。
- 57 濱田隼雄「非文学的な感想」『台湾時報』第279号、1943年、16頁。
- 58 伊東亮「糞リアリズム擁護」『台湾文学』第3巻第3号、1943年、18-20頁。
- 59 同上論文、18頁。
- 60 俳句における「糞的美」を論じる正岡子規「糞の句」（1900年1月）を始め、同雑誌には「糞」をテーマにした実作、俳句論が多く掲載されている。『ホトトギス』第3巻第5号、1900年、1-8頁。
- 61 たとえば、武者小路実篤「糞批評」は、大森義太郎や神近市子らマルクス主義者の政治的批評を「糞批評」と批判する。1936年に上梓され、初めて「糞リアリズム」という言葉を文壇論争の場に持ち込んだ林房雄『浪漫主義のために』も、同じような意味で「糞」を蔑称として使用している。武者小路実篤「糞批評」『文学界』第1巻第2号、131-134頁。
- 62 楊逵「田植競争」、彭小妍主編『楊逵全集第十三巻』、國立文化資産保存研究中心籌備處、1998年、601-602頁。原典は国立台湾文学館所蔵、同館のウェブサイトにて閲覧可能。  
[https://collections.culture.tw/nmtl\\_collectionsweb/GalData.aspx?GID=M1MLMEM6MLMD](https://collections.culture.tw/nmtl_collectionsweb/GalData.aspx?GID=M1MLMEM6MLMD)（2025年1月25日にアクセス）
- 63 このエピソードは、農本主義者の加藤完治が満蒙開拓青少年義勇軍訓練所での発言が元となっていると思われる。楊逵がどの本からこのエピソードを知ったのかは特定できないが、同エピソードが植民地台湾においても流通していたことが窺える。同エピソードへの証言は中村薫『加藤完治の世界 満洲開拓の軌跡』不二出版、1984年、58頁、もしくは長岡喜春『満蒙開拓青少年義勇軍よもやま物語』潮書房光人新社、1990年、35頁などを参照。
- 64 楊逵「芽萌ゆる」『台湾芸術』第3巻第11号、1942年、16頁。
- 65 同上書、18頁
- 66 楊逵「文芸に於ける明るさと暗らさ」、彭小妍主編『楊逵全集第十三巻』國立文化資産保存研究中心籌備處、1998年、669-670頁。原典は国立台湾文学館所蔵、同館のウェブサイトにて閲覧可能。  
[https://collections.culture.tw/nmtl\\_collectionsweb/GalData.aspx?GID=MIMXMEM6MLMD](https://collections.culture.tw/nmtl_collectionsweb/GalData.aspx?GID=MIMXMEM6MLMD)（2025年1月25日にアクセス）
- 67 楊逵「芽萌ゆる」、前掲書、434頁。
- 68 楊逵『鷺鳥の嫁入』台北三省堂、1946年、82－83頁。
- 69 楊逵「増産の蔭に」『台湾文藝』第1巻第4号、1944年、61頁。
- 70 張季琳「戦時下の楊逵——『増産の蔭に』をめぐる」、藤井省三・黄英哲・垂水千恵編『台湾の「大東亜戦争」：文学・メディア・文化』東京大学出版会、2002年、135頁。
- 71 楊逵「労働礼賛」『台湾文藝』第1巻第4号、1944年、78-79頁。
- 72 楊逵「増産の蔭に」、前掲書、71頁。
- 73 楊逵「首陽園雑記」、前掲書、481頁。
- 74 楊逵「「首陽」解消の記」『台湾文藝』第1巻第2号、1944年、9頁。
- 75 楊逵「幼春不死！頼和猶在！」『文化交流』第1号、1947年、19頁。
- 76 楊逵「現實教我們需要一次嘆」、彭小妍主編『楊逵全集第十巻』國立文化資産保存研究中心籌備處、2001年、252頁。初出は『中華日報 海風副刊』、1948年6月27日。
- 77 たとえば、この時期に楊逵の農園に通い、親交を結んだ林瑞明が著した伝記『楊逵畫像』には、「楊逵はいつ

も好漢である。「齒を折られても血と一緒に飲み込む」ような人間である。彼は無念で軟弱で傷ついた一面を人に示そうとしなかった」として、彼の男性的で勇敢な一面を強調していた。林梵『楊逵畫像』筆架山出版社、1978年、25-26頁。蕭阿勤が指摘したように、林の楊逵理解や彼への憧れは、けっして単独なものではなく、1970年代の「回歸現實」世代における楊逵ブームと中国ナショナリズム言説のなかで捉えられるべきである。蕭阿勤『回歸現實』、中央研究院社會學研究所、2010年、181-190頁。

- 78 戦時期の未発表の原稿において、楊逵は、「私が意見し、批判し、忿懣を吐いたそれぞれの人物——富岡、院長さん、天狗など、真実は第三者ではなく、私の一部分だつた」と自らの「この衰れなる性格の分裂」について言及したことがある。楊逵「性格の分裂について」、彭小妍主編『楊逵全集第十三卷』國立文化資産保存研究中心籌備處、1998年、630頁。原典は国立台湾文学館所蔵、同館のウェブサイトにて閲覧可能。  
[https://collections.culture.tw/nmtl\\_collectionsweb/GalData.aspx?GID=MAMLMEM6MLMD](https://collections.culture.tw/nmtl_collectionsweb/GalData.aspx?GID=MAMLMEM6MLMD) (2025年1月25日にアクセス)

(2024年10月15日投稿受理、2024年11月14日採用決定)